

ジェームズ・ミル 『経済学は役に立つのか—AとBとの対話』

櫻井 毅^a 解題・訳

解題

ここに掲載した論文は、James Millの論文、WHETHER POLITICAL ECONOMY IS USEFUL? *A Dialogue between A. and B.* in, *THE LONDON REVIEW* (1835-6) Vol.II, 1836, pp.553-571の全文の翻訳である。なお論文の本文での表題は上に掲げた通りなのであるが、それが掲載された雑誌の目次では、Political Economy—USEFUL, OR NOT?となっており、相違がある。ただここでは本文の表題に従った。

論文の掲載された *London Review* は1835年4月にジェームズ・ミルの長男の John Stuart Mill を事実上の主筆として創刊された雑誌であるが、翌年4月にはそれまで Jeremy Bentham の理論を母体にジェームズ・ミルを中心に結成されていた哲学的急進主義の機関誌であった *Westminster Review* と合併して *London and Westminster Review* と改題された。J.ミルはその合併前の *London Review* に数篇の論文を寄稿している。ここに訳出した論文は1836年1月発表のものでJ.ミルの最晩年の論稿であるが、そのあと同年4月「ロンドン・アンド・ウエストミンスター・レビュー」に発表した Theory and Practice: *A Dialogue* が同年6月に死去した彼の遺作となった。その論文も立法府の議員たちが理論を無視して実践を叫ぶ現状などを批判する視点などは、ある意味ではこの論文の続編ともいえる内容のものである。併せて読まれると有益である。なおこれはジェームズ・ミルの『選集』(*JAMES MILL Selected Economic Writings*, 1966)の編者である Donald Winch の認定を根拠にしている。現在まで、ジェームズ・ミルの唯一の伝記 (*JAMES MILL A BIOGRAPHY*, 1882)の著者である Alexander Bain は、Whether Political Economy is Useful? がJ.ミル最後の論文であると述べていた。

はじめに執筆者のジェームズ・ミル (1773-1836) について簡単に紹介しておこう。J.ミルは著名なその長男 J.S.ミルの父親として、またベンタムの高弟として知られているが、息子の J.S.ミルほどには世に知られた存在ではない。だが実際にイギリスの政治改革に大きな影響力を持った急進的な功利主義を創始し、直接その運動を展開指導したのは、主としてジェームズ・ミルであり、ベンタムと J.ミルの二人は相互に強く影響し合うことで歴史に名を残した。ジェームズ・ミルはベンタムを崇拜していたが、そのベンタムに学説を叙述させ出版するのを助けたのも J.ミルである。また息子 J.S.ミルを含む若者を組織し思想運動を展開した指導者は J.ミルであり、哲学的急進主義の推進者も彼であった。また著作や論文も数多く、なかでも『英領インド史』(*History of British India*, 3 Vols.1817)、『経済学綱要』(*Elements of political economy*, 1821)、『人間精神現象の分析』(*Analysis of the phenomena of human mind*, 2 Vols.1829)、『マッキントッシュ断章』(*a Fragment on Mackintosh*, 1835) は彼の代表作である。また *Encyclopaedia Britannica* の Supplement に寄稿した Education (1819) と Government (1820) は哲学的急進派のバイブルとみなされた。これらの著作は『英領インド史』を除いて1992年に刊行された *The collected works of James Mill* に収録されている。また最後の二論文は小川晃一訳『教育論・政府論』(岩波文庫)所収である。なお上記のJ.ミルの『全集』(collected works)は主要著作に内容が限定され、今回訳出した論文も収録されておらず、初期の無署名論文をはじめ多数の論文を含む彼の業績の全貌を示すものではない。

ジェームズ・ミルはスコットランドの農村で、エディンバラから移住してきた靴屋の長男として1773年に生をうけた。店は2、3人の職人を使う比較的余裕ある家庭であったと言われる。幼い時から頭脳に優れ、親は跡

a 武蔵大学経済学部 名誉教授 〒176-8534 東京都練馬区豊玉上1-26-1

継ぎを次男にゆだね、彼を名門の *burg school* である Montrose Academy に入学させ、さらに近くに所領と邸宅を持つ地主 Sir John and Lady Jane Stuart 夫妻とりわけ Lady Jane の積極的援助を得て、近くのアバディーン大学ではなく名門エディンバラ大学へ進学させることができた。ただその援助は貧しいが優秀な人材を聖職者に育てる奨学金であって、ジェームズはその資格を取ったものの聖職者になることを拒否して、ジョン・ステュアート卿の Fettercairn 家の家庭教師などで生活していたが、やがて彼の援助者が国会議員としてウエストミンスターに初めて登院するのに従ってロンドンに出る。29歳の時であった。大いなる野心を抱いてのことに違いない。

ロンドンに定住を決めたミルは、生活の糧を得るためにその地で知己を頼り、得られた機会には寄稿者として原稿を書き散らした。そしてやがて創刊された週刊誌 *Literally Journal* の主筆として、その雑誌が存続した4年間様々な論文を精力的に執筆した。1805年、彼は Harriet Burrow と結婚して翌年、長男のジョン・ステュアートが生まれるが、この長男に父が与えた幼児からの異常な英才教育については、J.S. ミルが自らの『自伝』に詳しく紹介しているところである。なお援助者のジョン・ステュアート卿がジェームズの長男ジョン・ステュアートの名付け親であることはよく知られた事実である。

その頃、ジェームズは様々な雑誌などに寄稿し『穀物輸出奨励金の不得策に関する議論』(*An Essay of the impolicy of a bounty on the exportation of grain*, 1804) や『商業擁護論』(*Commerce defended*, 1808) などのパンフレットによって、経済学者としての力量も示すことになった。現代のジェームズ・ミルの研究者で J. ミルの *Selected Economic Writings* (1966) を編集、刊行した Donald Winch によれば、J. ミルはエディンバラ大学の学生の時に、アダム・スミスの弟子の Dugald Stewart 教授から経済学を学んだとのことだ。彼がのちにその論文を読んで衝撃を受け、熱烈な信奉者になるリカードに会う前のことであるから、事実上、J. ミルはすでにスミスとリカードをつなぐ古典派の線上にあったと考えられる。彼は1821年に *Elements of Political Economy* を刊行するが、それはリカードの『経済学原理』(1817) の普及のためその内容の解説を意図するものであって、独自性はないと自ら述べているが、その内容にはリカードとの若干の違いも散見される。ただ彼は経済学の理論は基本的にはリカード『原理』をもって完成したと考え、自らをその学説の宣伝普及者の役割に限定したのである。

J. ミルはその間、様々な政治改革、教育改革など精力的な活動を行うが、あわせてインドにも関心を持ち、ほぼ10年の歳月を用いて大冊『英領インド史』全3巻を書き上げ、1818年に刊行する。彼はこの出版が契機になって東インド会社に就職することができ、爾来死ぬまでそこに勤務し、役員でない職員としては最高位まで昇進したといわれる。定職をえたミルはここからさらに政治改革を推進する哲学的急進主義派の指導者として活動を続けることになる。

ところでミルがベンタムと初めて会ったのは1808年ごろといわれている。当時、イギリスは政治的にも、経済的にも、さらに思想的にも大きな変革の時期に当たっていた。古い農村は解体されて資本主義化が進み、また綿工業を中心とする産業革命の展開は各地に新しい工業都市の形成を押し進め、フランス革命以後のヨーロッパの激動の影響もあって、イギリス経済の変動も著しく、政治的にも社会的不安を呼び起こし、政治改革は急務となっていた。多数者の要求を反映する議会の改革を主張し、議会上院の世襲的慣習を嫌悪し共和制すら容認しようというベンタムの急進的な功利主義の主張は、当時の議会改革の運動を側面から支持する役割を果たしていた。ロンドンで「リテラリー・ジャーナル」の主筆になった頃は過激な改革派ではなかったミルは、やがて独自の立場から政治改革の構想を持つようになったといわれる。ベンタムと知己になる前のミル自身の変貌として注目に値する、と日本では数少ないジェームズ・ミルの研究者である山下重一は指摘している。(山下『ジェイムズ・ミル』48頁) ベンタムとの出会いがどのようなものであったかの詳細はわからないが、その出会いによって、「ベンタムはミルに教義を与え、ミルはベンタムに学派を与えた」と E. Halévy はその著 *The Growth of Philosophic Radicalism* (p.251) で述べている。ミルはベンタムの「最大多数の最大幸福」の理念にもとづいて、のちに「哲学的急進派」とよばれるセクトを自らの周辺に形成して政治的改革的運動の推進者になるのである。彼はこのようにしてその興味と関心を政治的改革的改革に求めるようになる。

また同じ頃ロンドンの証券取引所のジョバー (jobber) で、かつ気鋭の経済評論家でもあったリカードと知り合った後は、リカードに経済学の研究をゆだねて自らはそれを放棄し、それを最終的にリカード『経済学原理』として完成させ、そのあとは彼をイギリスの「ケネー」とするべく啓蒙して説得し、やがて彼を下院議員として登場させ、トーリーでもホイッグでもない中庸廉潔な政治家に変貌させてゆくのである。経済学者というより政治改革者としてのミルのこのような志向は、ミルのこ

の論文を読むときにも留意しなければならない点でもある。ミルはリカードに兄事しその理論に傾倒するのであるが、そこに至る過程では、十分な教育を受けていないリカードに対してJ.ミルは書簡などを通じて懇切に論文の書き方などを伝授し指導していたのであり、さらにリカードが経済学について確固たる理論を構築したのちは、今度は政治家になるようリカードを慫慂したのもミルだったのである。ミルは一貫してリカードに対して教育者的な指導的立場を保持していたのである。そしてこの論文でもミルは古典派の演繹的な論理の意義について対話を通じて明らかにしているとも考えられるのである。T.W. Hutchison ;*On Revolution and Progress in Economic Knowledge* (1978)の Chapt. 2, James Mill and Ricardian Economics :a methodological revolution? では、ハッチソンはこの論文に登場する二人の対話者 A,Bのうち、BがJ.ミルでAがリカードであろうと推測している (p.51) が、J.ミルとリカードとの関係を知れば、そのような説明は十分納得できる場所である。Bが先輩の学者でAは弟子あるいは後輩であり、最終的にAがBの主張に説得されてしまうというその関係は、AでなくBがその内容と共にJ.ミルの分身であることを明らかに示すものであるが、他方、ハッチソン自身よく承知しているように、方法論については事実においてJ.ミルを教師としたリカードが、Bの相手Aであってもおかしくはない。ただここでは、1823年にすでに死去しているリカードをかつてのように弟子として登場させる時期は、とうに通り越していると考えべきであろう。あくまでも架空の対談であり、モデルは存在しないと考えた方がよい。(なお今回の翻訳に当っては、先輩と後輩の関係であることを文章的に敬語などをもちいて示したが、当然これは英語の原文では明瞭に示されていない。)

先に記したようにこの論文は彼の最晩年のものである。彼はこの後「理論と実践」という論文を「ロンドン・レビュー」の後継誌「ロンドン・アンド・ウェストミンスター・レビュー」の4月号に掲載するが、それが彼の絶筆となった。彼は1836年6月に結核のため死去するのであるが、死の直前まで知的活力は失われていなかった、と息子のJ.S.ミルは記している。

次に論文の内容について簡単に説明しておこう。一見してわかるように、この論文は対話の形式をとっている。こういう形式が当時の流行であったのかどうかはつまびらかにしないが、Doctor JohnsonとJames Boswellの対話による『ジョンソン伝』が、だいふ時代はさかのぼるが、有名である。J.ミルも何度かこの形式で論文を

書いている。

J.ミルはこの論文で経済学は役に立つかどうかというテーマに即して議論を組み立てているのであるが、ある意味では奇妙な内容の論文で、経済学の意義をリカードの『経済学原理』における原理的統一性に求めて、テーマである経済学の有用性も政策の役割に求めるのでなく、経済学原理における概念の論理的な構築の俯瞰的な眺望による知的満足に求めるという内容のものである。以下順を追って説明する。

テーマは表題に明らかなように、経済学は有用であるかどうか、というものである。AおよびBという二人の登場人物を通じて、最初にAの経済学は何の役に立たないという挑発的な発言を受けつつ、Bが経済学がたとえ抽象的であっても人間に有用である旨を諄々と説く。ただその説明は甚だ難解でには理解しがたいものがある。さてAに対して真理は役に立つものであり、誤謬は役に立たないとすると、経済学は真理であるのに役に立たないことになる、とBは反論するが、Aは矛盾するあれだけの学派があるのに経済学が真理とは思えないと反論する。それに対してBは経済学というものが諸国民の富の生産と分配、(交換)、消費に関する正しい命題の組み合わせであることをあきらかにして、それが科学であり真実の命題は役に立つものであることを主張して反駁する。しかしAは経済学に真実の命題があるということに納得できない。あるのはナンセンスな学説だけだ、というわけだ。Bは科学というものは徐々に作られてきているのだから、命題の真偽がまだ完全に実証されないとしても、そういう学問をナンセンスとは言えないといって説得する。それでも納得しないAに対して、Bは経済学に効用がある命題が存在するかどうかについて、二人の考えに違いがあるかどうか確かめたいうえで、効用には精神的なものと肉体的なもの二つが存在し、例として天文学を挙げ、その科学は人間生活に直接影響を与えるものではないが、精神的な喜びを与えるものであることを明らかにする。

そしてその上で経済学の主題を構成する要因が人間にとって最大の関心事であり、生産、分配、交換、消費にわたる人間の働きは、相互に複雑に関連し合う。その全体の動きを観察することから得られる俯瞰的な見方こそ知的な最高の喜びであるはずだという。Aは半ば納得するものの、なお腑に落ちない。Bは軍隊の将軍を例に挙げて、将軍が細部から全体について完璧に把握したうえで勝利のために作戦を準備することと同様に、経済学においても動因と作用が結び付けられてある結果を出すところでは、俯瞰的な見方というものが絶対に必要であることを説く。理論とは見方(考え方)であり、科学と

は知識であり、それは全体の見方であり、全体の知識だということである。Aは人間の苦勞と苦心が向けられる国富の生産や消費に向けられた動因と作用の巨大な結合についての俯瞰的な見方のことだと分かって同意する。残る問題は経済学は果たして科学に値するものかどうかのAの疑問である。Bに言わせれば経済学にとってその真理性を保証するには何が試金石になるか、ということだ。Aにとっては経済学には違った内容の学説がありすぎるといふ疑問だ。Bは権力者は自己の利益に反すれば数学の真理さえ否定してしまう、というホッブスの言葉を引きながら、真理が多数によって支持されることによって真理性が保証されるわけでないことを暗示しつつ、経済学の真理性の保証手続きについて話を移動させる。問題は経済学の理論が富の生産から分配、交換、消費の主題の原理を解明しようとする推論の結果が全体の中に包摂されて経済学になっているということだ。演繹法がそこでは経済学の方法として明らかにされる。Aは同意するが、それでも経済学説に残る不統一についてなお疑問視する。それに対してBは、経済学説は真であるとしても異論はありうるといふ。Aは納得できない。Bはガレリオの命題は当時反対されたが今日では真理とみなされている、という例を挙げて反論するが、Aは引き下がらない。Bは角度を変えて反論しようとする。つまりAが標準的な学説の反対する側に立っているというのだ。標準的な学説の賛成の者は発言しないが反対するものは積極的に反論を書く。だから目立つけれども、それはごく少数だと断言する。Aはそれを認めながらも、立法府の議員を例に挙げて、彼らの大多数は経済学説の反対しているのではないかと問いたす。Bは議員たちが経済学に何の知識もないままに議論しているとして彼らの意見は何の価値もないと軽蔑を隠していない。それが最後に言いたかったことであろう。BにAも同意してこの対話は終了する。

この論文について触れているものは、管見であるが、内外の文献にほとんどみられない。わずかに先に挙げたHutchisonの著書の中のCapt. 2, James Mill and Ricardian Economics: A methodological revolution? と Lionel Robbins; *THE THEORY OF ECONOMIC POLICY In English Classical Political Economy* (1952)の中で、ともに若干の引用を交えながら著者が論じているのに気付いた程度である。ロビンスは古典派の経済学がその有用性を政策論でなくて、ミルのこの論文にみられるような「一般的画一性」に訴えるものとしてあることの特異性を明らかにして、特にジェームズ・ミルのこの論文が、「非常に複雑化した出来事の連鎖を理解する喜びを与え

るものとして、それ自体価値があると主張する」(市川泰治郎『古典経済学の経済政策理論』1964, 152-3頁)と紹介していて興味深い。また前掲のJAMES MILL *Selected Economic Writings*の中でWinchは、IV章にJAMES MILL ON SCOPE AND METHODという項目を立て、論文Whether Political Economy is Usefulの抜粋を入れた。なぜ抜粋なのかの説明はないが、ところどころに省略した内容の説明や省略個所の表示を入れている。ウインチはその章での前書きでは、もっぱらJ.ミルの演繹法に触れるだけで、そこに唯一掲載されているその論文についての解説はほとんど行っていない。

なおこの論文は、私がまだ大学院の学生であった頃、玉野井芳郎先生から「未読だがジェームズ・ミルに『経済学は役に立つか否か』という論文がある」と教えられた時から関心を抱いていた論文である。それから10年ほどたってからロンドンに留学した知人に頼んでやっとその得難いコピーを取り寄せた。今から40年以上も前のことである。そして「経済学の有用性—ジェームズ・ミルの場合—」(1986)という論文の中で簡単な紹介をしたことがある。今回は改めて当時の試訳草稿に手を入れて訳稿の改善を試みたが、なお十分とは言えない。ただ重要な論文で、現在まで日本では拙論のほかには紹介されたことはないと思われるので、そのまま埋もれてしまうのも惜しく、あえて今回訳稿の発表に踏み切った次第である。誤訳や思わぬ誤解も多々残されていると思うので気づいたらご指摘いただきたくお願いしておく次第である。

【参考文献】

- Bain, A. ; *James Mill :A Biography*, London, 1882.
 Halévy, E. ; *The Growth of Philosophic Radicalism*, New York, 1966.
 Hutchison, T.W. ; James Mill and the Political Education of Ricardo, *Cambridge Journal*, vol.VII No.2, 1953. のち若干加筆修正の上 James Mill and Ricardian Economics: A methodological revolution? と改題され, *On Revolution and Progress in Economic Knowledge*, Cambridge, 1978. (早坂忠訳『経済学の革命と進歩』春秋社, 1987年) に収録。
 Mill, J. ; *The collected works of James Mill*, 6 Vols. London & Tokyo, 1992.
 Mill, J.S., ; *Autobiography, Collected Works of J.S. Mill*, Vol.1, Toronto, 1967 (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波文庫).
 Plamnatz, J. ; *The English Utilitarians*, Oxford, 1949 (堀田彰・泉谷周三郎・石川裕之・永松健生訳『イギリスの功利主義者たち』福村出版, 1974年).
 Robbins, L. ; *The Theory of Economic Policy in English Classical Political Economy*, London, 1961 (市川泰治郎訳『古典経済学の経済政策理論』東洋経済新報社, 1964年).

Winch, D. ; *James Mill : Selected Economic Writings*, Edinburgh & London 1966.

櫻井毅「経済理論の有用性—ジェームズ・ミルの場合—」、『武蔵大学論集』33巻5・6号, 1986年（『イギリス古典経済学の方法と課題』ミネルヴァ書房, 1988年, 所収）。

櫻井毅「経済学の有効性と方法論の提起—J.S.ミルの場合—」、『武蔵大学論集』37巻2・3・4・5合併号, 1990年（『経済学史研究の課題』御茶の水書房, 2004年, 所収）。

山下重一『ジェームズ・ミル』研究社, 1997年。

J. ミル 「経済学は役に立つのか—AとBとの対話—」

A … 私は経済学より法律学の方が好きです。

B … 好みについての議論はまったくしてないよ。

A … 私の言っているのは、法律の方がもっと役に立つということなんです。

B … 違いがもし程度だけのことなら、経済学は、最高ではないにしても、まだ君の高い評価を得ているわけだろう。

A … 私が本当にいいたいのは、経済学がまったく役に立たないということなんですよ。

B … 君は君自身の知識でそれを言っているのか、それとも他人の言うことをそのまま信じて言っているのかい。

A … 一部は自分のだし、一部は他人からのものです。

B … 私は君の権威に対しては大いに敬意を払っているし、またいつも誤りを正してもらっていることを有難く思っている。でもこの問題について十分納得して君の意見を受け入れるためにはもうすこし何か欲しい。それで、もし私に勝手を言わせてもらえるなら、すこし質問したい。私は君と私とが経済学ということで、同じものを指しているのかどうかはつきりしないのだ。

A … なぜあなたは私たちが同じものを指していないとお考えにならなければいけないんですか。

B … 人が違えば違ったことをするというのはとてもよく起こることだと思う。彼らは同じことを考えていないからね。今の場合、私の疑問はここから起こっているんだ。つまり君が真理と誤謬との違いが少しも重要なものではないと考えているとは、私には想像できないんだ。

A … もちろん考えていませんよ。

B … 君は真理が役に立つものであるべきだし、誤謬や錯誤は有害なものと思っているのかな。

A … そうです。

B … それでは、真理あるいは誤謬というものがかわる問題は、それに比例してより役に立つものであるか、それとも逆に、より役に立たないものであるかが、より重要になってくるということかな。

A … その通りです。

B … 何、それじゃ君は経済学がかかわる主題（subjects）——つまり諸国民の富というものが、何の重要性もないと思っているのかな。自然にではなく、その作用によってすべてのものが生産され増加されるものになるもの——それは人類の生存と楽しみに貢献しているものだ。生産されたあとで、自然法則がそれに強制するその分配、そしてそれが消費されることによって役立つというその結果、それには君は何の重要性もないと思っているのかな。

A … その問題そのものは非常に重要だと、私は思っていますよ。

B … 非常に重要な事柄に関して、真実の命題（propositions）とは、君も認めていたように、役に立つということだよ。間違っただけあるいは誤った命題とは有害だということだ。真理と誤謬との違いは、これらの主題の場合、したがって非常に重要だ。だから私は、君が経済学は非常に重要なものと言っていると、とったわけだ。

A … どうしてそうなるんですか。

B … 重要な主題についての真理は重要なものだという簡単な事情からだ。

A … あなたは経済学を真理と呼びましたね。

B … 呼んだ。

A … 何ですか。こんなにたくさん矛盾する学説 (doctrines) があるというときなのに。

B … 君は真理と錯誤以上に矛盾するものがあるとも思っているのかい。

A … 私はそういうことは言っていません。

B … 真実の見解とか誤った見解とかに関わらないで済むような主題を何か君は知っているか。

A … もちろん知りません。

B … だけど、あらゆる問題について真実の見解というものは、その主題についての科学 (science) であると考えられているということなんだ。間違った見解というのは科学ではなくて、科学の反対物なのだ。たとえばニュートンの天文学の体系は真理と判断されているが、デカルトの渦巻説やプトレマイオスの軌道説は錯誤の体系とされている。だからニュートンの体系だけが天文学の科学と呼ばれ、他の二つの体系はそうでないといわれているのではないかね。

A … それはそうでしょう。

B … だから私は君がこのあとどうなるかわかっていると思って、疑ってはいないんだ。

A … このあとどうなるか、っていうのは何ですか。

B … 経済学という科学は、言葉の適切さが遵守されているとすればだが、諸国民の富を構成する物あるいは物品の供給、分配、そして消費に関する正しい命題を組み合わせたものだ。それはすべての誤った命題を排除し否認してある。これが私が経済学と呼んでいるものだ。

A … 私が今まで経済学と呼んできたものは厳密にはそれではなかったと白状しないわけにはいきません。私とその言葉で理解していたのは、一部は誤った、一部は取るに足りない命題の寄せ集めということでした。

B … それは私の想像していた通りだ。先ほど、君と私は経済学という用語で同じことを意味していないと

いうことが大いにありうるということをあえて言ったわけだが、そのときそう思った。今やわれわれは問題を実際に非常に違ってみていることがはっきりしたわけだ。したがって経済学について語ったときには、われわれが異なったそして矛盾した言葉を——われわれの意味するものは終始同じであったろうが——用いてきたことは疑いない。少なくとも私は、君の使った言葉で正しく君の問題を語らなくてはならない。すなわち国富についての諸論点に対する誤った、また取るに足りない命題は役に立たないばかりか、有害ですらある、ということ、そして多分、君も認めることになると思うが、それらの問題についての真実の、そして重要な命題は、役に立つものであること、大いに役に立つものであるということだね。

A … そういう性質に値するような命題がもしあれば、ですね。真実の命題がそれらの論題について作られているということについては反論する必要はないとしても、しかし重要なものが何かそこにあるかどうかは極めて疑わしいと思いますよ。

B … それは疑いなく一つの問題点だ。もし何かそこにあったということが発見されたりすると、そこからあらゆる疑問が除去されるに違いない。この問題は大変重要なものの一つで、徹底的に究明されなければならないものだ。君が経済学におけるすべての真の命題が些細なものであると考えるんだったら、君はその理由を述べるのにおそらく反対はしないよね。

A … 私の理由は、少しでも重要だというものを何も知らないということです。

B … それでは、議論するのにふさわしいものをわれわれは何か持っているだろうから、その命題について直接に話ししよう。その上で経済学の命題のなかには重要なものはないということを書いてもらおうじゃないか。

A … 議論に役に立つなら、どうぞ。

B … もし認められたとしても、それで問題の解決になるというわけではない。二つの場合があるからね。これこれの主題について何ら重要な命題はいまだに作られてこなかっただろうという場合、他方、あれこれの主題について何らかの重要な命題が作られている可能性がありうるという場合だ。

A … それは経済学をナンセンスだと呼んでもいいということになりませんか。もしも経済学が実際に重要な命題を全く含んでいないことがはっきりしているならば、のことですが。

B … 私はそう思わない。なぜならそれを認めてしまうと、君が馬鹿げていると認めるに違いない結末に行き着いてしまうからだ。

A … その結末って何ですか。

B … こういうやり方で進めていくとこれを最高にはっきりさせることができると私は信じているのだが。君はすべての科学が起源を持っているという意見ではなかったよね。人類の知識におけるあらゆる偉大な領域において、何も知られていなかった時代があったし、また科学はすべて徐々に作り上げられてきたもの、という意見ではなかったかね。

A … ずっとそうだったと思っています。

B … それで、天文学についても化学についても、また機械学についても論理学についても、実際には重要な命題はまったく含まれていないといわれてきた時期もあった、というわけだ。

A … それは否定しません。

B … しかしその時であってさえ、天文学、化学、機械学、論理学はすべてナンセンスであったということが、正しく適切に言えたのだろうか。

A … 言えないと思います。

B … それでは、あえて言わせてもらえば、その理由は、重要な命題が知識のそのような領域においてまだまったく形成されていなかった時でも、重要な命題はそれでも形成が可能であったということなんだ。

A … なるほど。

B … 経済学がナンセンスだという君の主張を維持するためには、君はどんな重要な命題もその主題についていまだに形成されていないばかりか、どんな重要な命題もまだ形成されていないということも示す準備をしておかなければならないのだよ。

A … 私はそこまで言うつもりはありませんよ。しかしそれがまだ何の命題も含んでいないというときに、一つの科学をナンセンスと呼ぶのは不適當なことで

B … 私に言わせれば、そんなふうに言うのは言葉の間違った使い方だ。

A … それはどうしてわかるんですか。

B … まずナンセンスという言葉だが、さっきのような使い方をされれば、それはあやふやだし、間違った見解、つまり最高度の重要性を持つかもしれない一つの科学が揺籃期にあるということではなくて、それが重要なものになることはないというような、間違った見解を伝えてしまうおそれがある。だから、われわれはスコラ学者の存在論について、それをナンセンスというんだ。つまり、それが実際に健全で有益なものを何一つ含んでいないばかりか、さっきのような主題について役に立つ命題が何一つ作ることがないという意味でだ。次に科学という言葉を一連の誤った、あるいはつまらぬ命題に適用するのは、言葉の誤用である。科学とは、真実かつ重要な諸命題の組み合わせを意味し、そしてそこでは、いくつかの命題が含まれていないような重要な問題はそのなかには見出されないほどに、関係しているすべての主題を完全に包含しているのである。科学は、すべてがそうなったときに、役に立つということだ。科学という名称はかくのごとき完全な状況にまで近づかなければ、その名に値しないし、正確な言葉使いともいえない。

A … それではその重要性も議論されていないような問題に関する学説の内容について、あなたはどのように自分の考えを述べようとされるんですか。どんな学説がナンセンスだと思っていられるんですか。

B … 確かなことの一つは、ナンセンスな命題の一纏めを科学だとは私は決して呼ばないということだ。私はむしろそれらを常識 (wisdom) と呼ぶことを考えたい。私はそれらを科学ではなくてナンセンスと呼ぶことから始めることにしよう。私はそれを同じ性質のものとみなしているのではなくて、むしろ反対のものとみなしている。私の考える適当な言い方というのは、それらの問題がまだ科学の恩恵を受けておらず、それについて知られていることのすべては、役に立つものでないということだ。

A … なるほど。それではあなたの言い方を経済学に当てはめさせていただきます。そしてその問題がまだ科学の恵みを受けていなかったということ、そしてそれについて今まで作られてきた命題は正しい

ものでもなかったし、意味あるものでもなかったと言わせていただきますでしょうか。

B … これが君の提案だとすると、われわれは次にそれが十分根拠付けられているかどうかを調べなくてはならないね。

A … そうしてください。それを調べてみてください。

B … 私の想像では、経済学における命題のどれこれが真実であるかどうかの問題に深入りする必要はないね。というのは、もしその重要性を無視するとすれば、どんな主題についても真実の命題を作ることはいやしいからだ。だから次のように言うことができる。労働は商品を作り出す。労働は苦痛である。そしてそれはいくらかの報酬をうる見込みがあるから努力しているに過ぎない。ある男は道具を使って、道具なしでやる以上働くことができる。そして同じように、われわれは冬より夏の方が暑いとか、牛の方が普通羊より重い、等々言うことができる。君が実際に提起した疑問は、経済学において何らかの大きな有用性 (utility) のある命題が存在するかどうかということだな。

A … その通りです。

B … 君が有用性という言葉を使い、私が有用性という言葉を使う時に、われわれ二人が一緒に同じことを考えているのか、それとも一人があることを考え、もう一人は別のことを考えているのかを、ここでもう一度、調べてみる必要があるように思うが、どうだろう。

A … これも前と同じ事例になるとお考えなのですね。

B … まずその点を確かめておけば、もっとずっと満足してわれわれの検討に入っていけるわけだ。そして私の考えでは、君の解答に若干の質問をすると、われわれに必要な情報を与えてくれることになるんじゃないかな。

A … そうしてください。

B … 私がしようとしている最初の質問に対する君の答えは予想できるな。つまり、君はあらゆる有用性がポンド、シリング、ペンスで表わされるようなものだと考えているのかどうか、ということだけど、君はそうでないというだろうね。

A … そうです。

B … それじゃ、君は有用性ということに一つでなくもっと多い種類があるという考えだね。

A … もちろんです。

B … そのより一般的な種類を確認してみることにしようか。私のこんなやり方で、つまり、人間の本质が肉体と精神という二つの部分からなっているのではないかなと自らに問うことによってね。

A … なるほど。

B … その二つの部分に関連して、一方で肉体の幸福に資するものを、もう一方で精神の幸福に資するものを、同格の有用なものとして考えてはいけないうか。

A … いいんじゃないですか。

B … 幸福に資するというで、私は喜びを生み出すもの、または苦しみを除くものと考え、それが直接的であれ間接的であれ、あるいは迂回的であっても、それを私は問うつもりはない。

A … 私はその定義に反対はしません。

B … 同格の有用物とは、したがって、肉体的な喜びを生み出すものか、または肉体的な苦しみを除くものであるし、同時に、精神的な喜びを生み出すか、または精神的な苦しみを取り除くものであるわけだ。

A … それらは二つの最も包括的な種類だということですね。

B … 私は、われわれが当面している疑問に決着をつけるために、それらの相対的な価値を議論し、全体として、肉体の幸福あるいは精神の幸福のいずれが重要かを確かめるよう求められているとは思っていない。間違いなくその二つとも重要だというのが君の意見だ。

A … そう思います。

B … われわれの今の目的にとってはこれで十分だ。われわれの検討する第二の段階はこういうことだ。つまり、何者かが肉体に喜びを与え、ほかには何の効果も与えないまま、その点で有用であるとしたように、何らかの秘められた効果もないままに、精神に喜びを与え、有用であるのなら、そこに確実な何かが存在しているということはないのだろうか。一つの適切な例解として天文学に言及するといいかもしれない。この天文学という科学は、その周知の成果

のいくつかを除いては、人間生活に対しては何かの手引きになるというものではない。それは全く観念的なものだし、それがもたらす喜びも、純粋に精神的なものだ。しかしそれが心に与えられる喜びというものは、それが無数の巨大な対象をつかむということを含蓄するものであって、それらの相互作用と依存作用を厳密に追跡する場合には、その喜びは非常に大きなものとなるといわれている。私は君がこのことを認めるのを躊躇するとは思えないがね。

A … もちろん躊躇しませんよ。

B … この喜びは、したがって、良いものだし、それで得たものは役に立つということだ。

A … そうなりますね。

B … われわれはこの喜びが相対的に持つ価値を念入りに研究する必要はない。単なる肉体的な喜びは、自分でそのままに受け取り、精神的なものが何も付け加わっていないとすれば、すべて足してもその価値は、いかに小さなものでしかないかはよく知られている。食べたり飲んだりする喜びを最も好む人は、孤独な食事から逃れる。そして楽しみはそこでは僅かなものになってしまうと告白する。恋の喜びについて言えば、われわれは、肉体のそれは精神的なものがなくなってしまうとすれば価値はほとんど無いし、本気でその影響下にあると思っているような人間は人類の中でも最低のものであることを知っているわけだ。

A … それはすべて真理です。

B … 君はこの一連の考え方の行く先がどこかわかるね。

A … あなたはこういう結論にしたいというのですね。つまり、喜ばしい思考の存在のなかで始まり、そして終わるような、純粋に精神的な喜びが、われわれの心の自然の働きである楽しみの中で高く位置づけられ、われわれが役に立つと称する物事のなかで、それらの原因になるということですね。

B … 君は結論をはっきりと上手に突き止めてくれるね。かくして今やわれわれはある点では合意していることになる。それはわれわれが今問題にしている研究にとって、都合よく当てはめられることになるだろうと私は思うよ。

A … そういう風に言われると嬉しくなりますね。

B … 経済学の主題を形成する要因というのは、人類にとって最高に関心ある要因なのだ。それらは、事

実、生産に、分配に、そして交換に関連する多種多様な働きである。一言で言えば、個人や国家の富を構成するすべてのものを、つまり、ほとんどをそこに費やされている人間の労働や計画や苦勞を、消費者の手に渡すことである。それらの働きには非常に多くの種類があり、ある決まった法則にしたがって、相互に従属しあい、また相互に制約しあいながら、そしてまた、一連の手筈によって助けられながら、他のそれによって妨げられながら、非常に複雑な体系のなかで相互に関連付けられているわけだ。この複雑な因果の連鎖は人類にとって最も興味あるものを結末にさそう。それは事実の過程を追跡し、そしてそれらの連鎖をはっきりさせるといって純粋に探求する精神に対する快い訓練にならざるをえない。そしてもしそれが、事実の順序を深く考察することによって、それをすべて適当な数の連鎖に分けるためにそれらがどのように相互につながりあっているかを発見することに成功したとすれば、そしてそれによって、全体を知性の目で瞬時に捉えることに成功したとすれば、すべてのものが現れる様式がはっきり理解されるようになるんだ。自分自身を高みに押し上げようとしている人間として、彼はそこから最高に可能な利益ある情景を見下ろすことができるのであるが、その彼は、それを構成している巨大な対象を、そして見てわかる動きを見るだけでなく、それらの原因、そしてそれらが目指している結末を見て、そしてそこから最高の楽しみを引き出すわけだ。——大部分の興味ある、そして複雑な心理的状況についての知性によって獲得される、同様の俯瞰的な眺望 (commanding view) は、たとえそこからそれ以上の結果が引き出されないとしても、最も高い価値の満足を生み出すことになるに違いないということは確実ではないだろうか。

A … 疑いないことですがけれども、人間の行動の分野で非常に大きな部分を見渡すそのような俯瞰的な見方 (commanding view) は、そしてその行動は非常にさまざまであり、またそのような興味ある結果に傾きがちですが、現に生じているのであり、それは高級な喜びを生み出さざるをえないわけですね。そして他方、われわれ人間の性質の中で最高の部分つまり知的部分に関するそのような満足感が、われわれが享受できる喜びの中で第一級の地位を持つに違いないということを認めることのできない者は、人類の中で最低の一人に違いありませんね。

B … 私はそのとらわれのない発言を称揚したいな。そしてそれが君から出てくることを期待していたんだ。今やわれわれは、多分、君が最重要なものだと認めると、私が予想している、ある一つのことをわれわれに示してくれる真理の光をもつことになる。しかしそれはよく理解されないことが結構多いのだ。そして理解はしないが理解なしに判断を下せると思っている思慮のない人びとによって、それは何の重要性もないものとされてしまっている。

A … それは何のことですか。

B … われわれが今まで考察してきた俯瞰的な見方と、先の人たちが理解している有用性の特性との関係のことだ。つまり有用性の特性とは、彼らが味わい、手で扱い、においをかぎ、そして観察のできるもの、端的に言えば、市場で売ったり買ったりすることが出来るものことで、そういうものに対して彼らは実際の有用性という言葉を用いるわけだ。もしもこの知的作業が、この同じ実際の市場的な有用性にも支配的な影響力を持つようにならなければならぬとすれば、われわれは精神的過程の価値についても、彼らの意見を変えるよう彼らに期待してはいけないうらうか。

A … 確かに、他のものの有用性を増やすものはそれ自体役に立つものですね。

B … それは非常に妥当な言い方だ。無数の働きに対して適用され、ある望ましい結果にすべてが帰せられるとするなら、その手筈が、役に立つ働きをなご一層役に立つものに変えるということを君は否定していないよね。

A … 否定していません。

B … そのような作用は、普通、自動的に最高の段どりを準備するものではないし、そして、もしそれらに任されたならば、一つの働きがもう一つの働きを妨害するかもしれないということを、君はほとんど否定しないだろう。同じことが、必要以上により頻繁になされることになるんだ。そして全体の成果は、それができたはずのものより小さいものになってしまう。しかもそれは、もし作用している原因がよりよく方向付けられていた場合であってさえも、の話である。

A … 誰もそれを疑うことはできませんね。

B … それがその調整の過程ではないのかな。それは君が非常に重要であることを認めたもの、つまり完全に知的な有用性であり、われわれが今までずっと考察してきたかの俯瞰的な見方の直接的な成果ではないのか。

A … どうしてそうなるんですか。私にははっきり掴みません。

B … このようにしてみたらどうかな。まったく説明されていない事柄を整理することが出来るか。もしそれが今まで考察されたことがなかったものだったら、しかも適切な場所に置かれることになっている事柄すべてのことも同時に考えるとしたら、何かあるものをしかるべき場所に配置することができるだろうか。

A … とてもできません。

B … こういう整理のためには、だからこそ、あらゆる事柄を取り込む一つの包括的な見解が、絶対必要なのだ。

A … その通り。

B … しかし、もしも物事が、お互いに自らの作用についてのある一つの観点で整備されるものとしたら、そして、ある効果を生み出すその作用すべての傾向についてのある一つの観点で整備されているものとしたら、非常に多岐にわたる詳細な事項が説明されたに違いない。われわれは経済学の巨大な分野の中で理解された事柄の孤立した非常に狭い部分に言及しただけで、事態を説明したことになるのかもしれない。紡績工場が必要とされる道具や人間の数は大変なものだ。そして彼らが作りだそうとしている効果は遂行される。量と質が完璧に考慮されればされるほど、生産手段はますますより完璧に配置される。そうでないかな。

A … 認めましょう。

B … われわれはこの種の主要な組織における配置が、きわめて優れたものであると想定できるだろう（それとも想定できないか?）。すべてのものはそれがおかれるべきところに正確に収まっている。——その作用はやって来るべきまさにその瞬間に始まる。——すべてのものは、それによって作用されるものと、そしてそれが作用するものと、正確に合致するように形づくられている。——すべての力はそれが作り出す効果に正確に比例している。——そしてす

べてこれは、力の浪費はなくて、窮極的な生産物は可能な限りでの最も少ない力の支出によって獲得されるだろうということに帰着する。

A … 全部賛成です。

B … さて、それで、全体について包括的な観察をするというある程度普及している考えによってなされるべきだというその整理は、それらすべてのものの結合を成功させるために、ある特殊な効果を生み出すために望みうる最上の方法でそれらを協力させるほどには精巧である必要はないのではないか。それは考察してみても何も残してくれない。それは巨大な協力作業のすべての部分について観察する。つまり、いかなるものであれ、多すぎても少なすぎても、それがあるところすべてに表示を付けるのだ。そこではあるものが他のものを邪魔しており、また、何かあるものが他のものの完全な作用には不足している。そしてこの知識の力を借りて、すべてのものを配置し釣り合いを取らせるのだ。そうでないか？ 全体の知識なしに、ある一つのもものが一つの全体として組織化されることが可能だと君は思えるか？ ある軍隊の将軍が作戦のそれぞれを他のすべてとの関連で十分完璧にして、その結果、それぞれが一般的な帰結——敵の撃滅、をもたらすのに最大限の貢献をするように作戦を準備させることができるような包括的な観点によって作戦のすべてを自らの頭の中に掌握することもできなければ、戦いで無数の作戦を準備することなんかできるかね、できやしないよ。

A … それには異議をさしはさめませんね。

B … 会社の役員や部局の長は、彼自身の属する部分の詳細はわかっており、その中で適切な調整を行っている。しかしそれはごく一般的なことだけだ。彼の願望はすべての作業に広げられている。それらの作業を一つの協働的な組織にまとめ上げるのはその彼であり、また、彼の包括的で俯瞰的な見方の助けを借りてそうすることができる状況にあるのは、彼だけなのである。そしてその知識を最も上手に使いこなすのもその人である。彼の力の幾つかの部分をも最も可能性のある説明に変え、そして彼の目標の達成のためにそこから最大の助けを引き出すのも彼なのである。これこそ最高の戦略家そのものなのだ。

A … それはそうですね。

B … それでは君の同意を得て、それを一つの一般的命題として規定しておこう。その命題というのは、おびただしい動因と作用が、ある確かな結果あるいは一連の結果を作り出すために、結びつけられるところではどこでも、全体について俯瞰的な見方というものが、最も完全な方法でその結合を果たすために絶対に必要だということなのだ。

A … 同意しますよ。

B … しかし全体の主題についての俯瞰的な見方というのは、その部分のすべてにおいて、また、それらの部分それぞれとの関連において、その主題についての理論あるいは科学につけられた別名に過ぎないのではないか。理論 (*θεωρία*) とは文字通り「見方」であり、科学は *scientia* つまり「知識」である。つまり見方、あるいは知識が意味するところは、それが、たんにあの部分この部分のものでなくて、あたかも先の将軍の軍隊に対する関係のように、「全体」についての見方、あるいは「全体」にわたる知識だということなんだ。

A … あなたが続けようとしている推論は私にもわかります。つまり、あなたは経済学の理論または科学というものが、人間が享受しそして消費する物のすべて、言葉を変えて言えば、人間が富の内容と名付けるもの——人間のほとんどすべての苦勞と苦心が向けられる偉大な対象、その生産に従事している動因と作用の巨大な結合についての俯瞰的な見方のことであると、あなたは言いたいのですね。

B … 君は私の言いたいことを正確に言い当ててくれるね。

A … あなたはさらに私に尋ねるに違いないと思っていますよ。間違いなく、です。目的に役立つように起こる無数の作用が、一つ以上の方法では起こらないのかどうか、つまり、悪い方法では起こらないのか、それともよい方法では起こらないのかどうか、と。それが最善の方法で起こらなければならないということは重要でないのかどうか、と。そしてまた、最善の方法と最悪の方法とのあいだの違いが、非常に重大にならないのかどうか、と。——なお、重大になるというのは、特別の目的に関してのことです。富の内容の生産のことをいっているつもりです。そして、これらすべての疑問に対して、私は肯定的に答えることにならざるをえないでしょう。

B … 私は論争のとりこになってしまいそうだ。いつも君のような論争相手と一緒にだね。君が、ある点が維持しがたいものであるとわかった後では、その点について論争しても君は誤りであったという自覚に抵抗することができないだけじゃなくて、それどころか、君が以前に拒否していた一つの命題にすでに賛成しているとすれば、君の気持ちは前向きに動いて、新しく承認された一つが導く他の命題を見つけて、真理の熟達し誠実な追求者として進んでそれを受け入れることになる、というわけだ。

A … それを支持する根拠があると分かった以上、もし命題なるものを私がすすんで受け入れなかったとすれば、私はとても人間の名には値しないことになりまよ。

B … 人間という名をもつ人々がいる。その名にふさわしくより尊重されるべき人々がいる。またその微妙さがわからず、そのような自覚なしに行動する人々がいる。しかしこれはその目的から来ている。君がやったように、富の生産と利用に役立つ大きなそして数多い一連の作用を適切に指示し誘導するということが大部分が依存していることを認めるならば、また、良い指示と悪い指示とのあいだでは結果が有利かどうかで違いが大きくなるということを知るならば、君が一般的に論じていたと同じように、この特殊の場合にも、すべてのことが説明されなければすべてのことをうまく整理できないということを知り、君が承認することを私は疑わないよ。つまりすべてを見ている人物は、すべてを整理できる唯一の人物なのであり、またすべての部分が協働的になっているか、あるいはそうっていないか、を発見できる唯一の人物なのである。そしてまた他に破壊的な影響を与えることなしに、一つの部分にいかにして何らかの変更をなすかを知り、発見できる唯一の人物でもある。簡単に言えば、物事についての一般的で俯瞰的で完璧な見方、——それは適切にも科学と名付けられているが——これは、最終的な成果を獲得することをめざして、それにかかわるすべてのものを最大限に寄与させながら、重要な仕事でのあらゆる可能な利益のために、無理なく望みうる唯一のものなのだ。

A … その結論は議論の余地のないようにつくられているようにみえますね。

B … それじゃ、今君が、経済学は重要な科学であるという私の見解に改宗してきたと考えてもいいよね。

A … もしも、あなたがずっとお話をされてきたすべてを包括する見解、そして私が完全にその重要性を認めていた見解をもつこともない、そんな科学というものがあったら、それが科学という名前で通用するものだとしたら、それは単なる一見解の断片ではないとしても、大部分誤りで、決して役に立つ結論には導かないでしょうね。

B … 経済学という題名で教えられている学説が、科学の名に値するかどうかということが、正当な問いかけであることを、私は君に非常に快く認めるよ。その疑問を解決するためには、多分、どれが科学の基準なのか、あるいはどれが科学の試金石なのか、君が考えていることを指摘することになるだろう。つまり、その特徴またはその性質によって、何らかの諸学説の統合が科学として知られるものになるか、そうでないか、ということなのだね。

A … 私がそのような仕事に向いているかどうか、疑わしくなってきました。

B … しかし、もしもわれわれが自分自身の頭の中に、科学が何であり、何でないかについて、立派で正確な概念がなければ、つまり、もしわれわれが、科学のためにわれわれに提供された学説のすべての構造(scheme)を吟味できる何らかの基準をもっていないとすれば、われわれに何ができようか、われわれは何が科学であり、何が科学でないか、の満足すべき根拠を知っているものでなければ、科学を云々する、あるいは科学でない云々する、つまり、それが科学であるか、そうでないか、を語る資格を持つとは考えられないのだよ。

A … 間違いありません。科学というものの構成要素についてこんなよい助言をもらったことがなかった以上、私が経済学者の学説は全く科学ではないと発言したことはまったく合理的な行動ではなかったことは分かります。しかし私は依然として、もしも人が科学の本質的な性質について不明瞭な考えしか持っていないとしても、ある一組の学説が科学の頂点にまでは到達していないと語れる程度には、それらについて十分知っているだろうという考えです。彼は、その命題に異論がさしはさめられているか、あるいはそれらがあらゆる問題について解明をしていないか、ということを知っているはずですよ。

B … 君は、ここで科学に特徴的だと君が考える二つの点を披露した。第一は、命題は異論をさしはさめるも

のであってはならないということ。第二は、それがあらゆる問題を解明するものであるということ。他にもっとあるかな。

A … とっさに言われても、今はないです。でも考えてみると、それで十分のようです。

B … その点を決定するためには、われわれは、解かなくてはならない二つの問題、つまり第一に、それが本当に特徴点であるかどうか、第二に、それが適切なものかどうか、という問題がないかな。

A … それらは本当の特徴点ではないのですか。

B … そのなかの第一のものに関しては、命題が真であるとか、まだ異論がさしはさめる、というのは可能ではないのではないかな。

A … それは私には否定できません。でも真理は、長い目で見れば、普及していくといわれていますよね。

B … 君はきっと記憶していると思うが、非常によく引用されまた承認されているホプスの言葉があるね。——もし数学の真理が権力を有する人々の利益に反していた場合、真理は論駁されていたであろうし、否定されていたであろう。そしてその権力者たちは、真理を主張した者を圧迫した、という言葉。

A … 覚えています。

B … その権力によって言論における流行をあたかも衣装におけるそれのように人々に決めさせることができる人たちは、一連の学説が自分たちにとって利益でないとすれば、また理論を学び理解するための不愉快な思考努力を自分たちに要求されるとすれば、その一連の学説は彼らの利益に反するものとみなしてしまう、という場合、長い間その真偽が問われていた諸命題の可能性が、それがいかに真理であるにせよ、大多数の人々によってまったく拒否され、そして何の重要性もないと考えられることで、見えなくなっているのではないかな。

A … そうということがどんなによく起こるかは知っています。そして真理の確証に基づいて自分の見解をつくっている人もほとんどいないことは認めないわけにはいきません。そして利害の感覚は、非常に多くの人々の心を、信じるか信じないかというかたちで、またいくらかの人々は自分たちの関心がめざしているようにではなく、思考が一種の無気力状態に陥ってしまうところまで、ゆがめてしまうのです。

そして私は人々の心の一般的な精神の無気力さ（supineness は supinelessness の誤記か）が、困難を回避することにさえ用意されていて、そして意見が他の誰かの利益に関係ないときには、その力や地位や名声によって優位に立つ人たちによって教え込まれたその真理を、正しいことと考えるようになっていっていると、私は認めます。

B … 私は、だから、ある一つのまとまった見解の科学的性格に対する明瞭な指標として、その問題の真偽が議論されていたということを君が強調するだろうとは思っていない。というのは、われわれはニュートンの天文学説が長いことその真偽を論じられていたことを知っているからであり、星法院（Star Chamber）の有用性なるものが長いこと強調されていたことを知っているからであり、そして政府が、本当は、人々の代表であるものが、災いをなす妄想として、長らく扱われていたことをわれわれが知っているからなのだよ。

A … 「疑問の余地がない」(undisputed) という言葉を、「真の」(true) という言葉に置き換えたなら如何でしょう。あなたは、とりあえず試験的に、ということだったら、これには反対ではないでしょうね。

B … 確かにそうだ。ただ何よりもまず私が真理を検証することが可能だとすればの話だがね。君の提起した変更に従えば、君の二つの点は、第一に、命題は真理であるということ、そして第二に、それらは主題を完璧に説明している、ということになる。そして誰も、主題を完璧に説明している真の命題の一組が、その主題についての科学であるということを否定しないだろう。しかしそれらの点は、何が真の命題であり、それらがその主題のすべてを網羅しているものなのかどうかを、決定する方法をわれわれが持つまで、われわれには何の役にも立たない。君はそれらの点のいずれかが決定できるような検査の方法を何か挙げることができるかな。

A … それはできませんよ。でも、それではわれわれは、科学というものが存在するかどうかを決定することができないという見解に、甘んじなければいけないのですか。

B … 何かもっと良いことができるというなら、私は否というだろうね。そして私は、ある一つの命題が正しいか、あるいはある一組の命題がある一つの主題の完全な説明を含むかどうかを決定するについて、

どこまでわれわれが前進できるかということを知りたくて探求しなければならぬと考えている。あとの方の疑問に関しては、確信が得られるところまで近づくのが前の方の疑問よりむしろ容易である。前者は、もしも君に全く異論がないとすれば、最初に、そのことを考える理由になっているからだ。

A … 異論はありません。

B … ある主題は、ある定義の中か、叙述の中に、含まれているだろうと私は思う。それは、どの部分も残されていないということがほとんど確実というような形で、だ。但し、その確実性をうるには、過大に含まれているということがないかどうかという疑問が出てくるかもしれないがね。

A … 私はその説に賛成です。

B … ある主題が全部、このように研究者の前にある時、研究者は多分それを幾つかの部分に分け、そしてあとでその部分を、容易なそして確実な理解のために十分なほどに細かく単純に、前と違った部分に再分割するだろう。

A … 多分彼はそうしますね。

B … それらの各部分を説明する諸命題は、したがってかなり確実な証拠を持ってつくられるだろう。そしてそれらすべての部分部分についての諸命題がまとめられたときには、それらはその主題についての完全な説明を構築するに違いない。

A … それは正しいですね。

B … われわれがここで合意したいいくつかの点について、経済学に適用してみようじゃないか。経済学の主題について、それが何も省略していないことをわれわれが確実だと思えるような——たとえその主題に属さない何かを含んでいたとしても——そのような定義をつくり、あるいは叙述をすることは、可能であろうか。たとえば、もしわれわれが経済学の主題が富の内容を作り富の内容を使用することにかかわる作業の体系であるというならば、われわれは、若干の確信を持って、われわれの定義がその主題のすべてを包含していると結論してはいけないうまいか。こういうふうを考えてみよう。——人間の追及する何らかの対象に関して、目的と手段とが我々がそれについて知りたくて思っているすべてのことを含蓄していないだろうか。このようにして、医学について、目的は病気の除去であり、手段は医術の完

全な供給源である。だから医学という科学は病気についての知識であり、治療の手段についての知識だということになる。

A … それはみな根拠が十分ありますね。

B … 富をどう見るかについていうと、それは人がそれを待ち構えそのために苦勞するもの、そしてその供給が多いか少ないかによって幸せと惨めさが決まり、国の強さ弱さを大きく左右するものであるが、その目的は使用であり、生産はその手段である。問題は、経済学の理論がそれらの諸目的を十全に取り込んでいるかどうかである。まずその生産について、それがそうなっているか調べてみよう。二つの大きい手段は、人間の労働であり、またそれと共に、またはそれに支えられて、労働が雇用されるものであり、この二つは最終的には資本キャピタルという言葉に含まれる。したがって、もしも経済学が自然法則を、生産に労働と資本キャピタルが使用されているという事実に基づいて、説明するものとすれば、それらはこの主題のこの部分を完全に理解していることになる。詳細には立ち入らないが、私はこの学説が主題のこの部分を、いかなる省略もなしに、説明していることを確信しうるのではないか、と思っている。もっともこれは経済学の論争的な部分ではないけれどね。

A … 認めましょう。

B … 生産に続く使用ということについて最初にすることは、所有すること、つまり分け前を受け取ることである。使用についての第二にすることは、ある人によって所有されたものが、その人の欲するものではないが、多分、もしくは現に、それを自分の欲するものと交換するという場合だ。使用ということについての次の、最後にすることは消費である。所有、交換、そして消費は、したがって、経済学の主題のこの最後の部分の三つの区分である。それらの主題の命題のすべての真実性については、研究者のあいだに完全な合意はないけれども、私は主題が命題を説明しているその完璧さについての論争などありえないと確信している。たとえば、年々の生産物全部が三つの分け前に、つまり一つは労働者に一つは資本家に、そして一つは土地所有者に分けられるということに議論の余地はない。大問題なのは、それらの分け前を何が規制し、何が一方がこれこれ他方がこれこれだという量を決定するのか、ということである。賃金の原理、資本ストックの利潤の原理、地代

の原理を突き止めようとする哲学者たちの試みが、その問題の解決への試みであり、またその結論が真であるにせよ誤謬であるにせよ、その結論は問題のあらゆる部分を包含しているということはよく知られている。次に交換について言うと、その二分類は、国内の商品の他の国内の商品との交換と、国内の商品の外国の商品との交換である。そして問題は、それらの交換がそれぞれ役に立つ用途とは何のことであり、その交換を規制している法則とは何か、ということ、言い換えれば一商品が他の商品——かなりある国内と外国との場合でも——と交換するのに与えられるであろう量を決定する法則は何か、ということであり、そしてまた、交換を容易にする偉大な道具である貨幣の性質と原理は何か、ということである。それらの主題について研究者たちが到達する結論に関する意見の相違がどうであるにしても、それらに関して知ることが役に立つものであることは全部彼らが理解していることは疑いないと信じている。われわれは使用ということについての最後の部分である消費にいまや到達した。これは二つの種類に分けられる。年生産物のどの部分が誰の分け前になったとしても、彼はそれを二つの方法の中のいずれかで使用することは確かだ。つまり、一方はもう一度それをつくり出すためであり、他方は、必要に迫られたため、あるいは犠牲にされている楽しみのためである。この消費の二つの種類、すなわち生産的消費と不生産的消費は、あらゆるものを——国のすべての構成員の富、そしてその合計である国家そのものの富——を含んでいる。そのような消費の様式の性質と結果は、経済学の学説に取り込まれている。そしてこの推論によって、国の富についての科学が完全に経済学の中に包括されていることが明らかになる。

A … まさにそうですね。

B … だから経済学は、科学にとって必要だと君が示した一つの性質——それは関連する主題のすべてを説明していなければならない、というその性質をもっている。

A … そのとおり。

B … 君が絶対に必要だという第二のものは、学説というものは真理でなければならないということだった。そうなると、その学説が真であるかどうかを知るためには、経済学の学説にわれわれが当てはめようとする判断基準なるものは何かということになる。

A … それについての経済学者の不統一は、少なくともすべての彼らの結論の不確実性についての、十分な根拠になりますよね。

B … 真偽が問題になっているすべての学説は、真でないか、または少なくとも確証されていないというのが、君の意見なのかね。

A … 必ずしも何時もそうだといっているわけではないはずです。でも、大体はそうですね。

B … それでは経済学を、私は特別扱いにしてもらうように主張したいな。つまり学説は真だが、議論の余地がないものではないということ。

A … それが特別であることをどうやってあなたは証明されるのですか。

B … それがそうでないということを君はどうやって証明するのかな。

A … 私はそれを証明する気になりません。しかしその不一致が不信の一つの理由だと考えます。

B … 普通の言い方からすれば、これは行き過ぎた話になったかもしれない。訴訟で争いになった財産にはすべての場合、権利の問題について不一致が存在する。そうした場合には君は、すべてどちらの側にも権利はないと結論することになるのか。ヨーロッパのあらゆる男女がローマ教皇を無謬と信じている時代があった。その時、その命題は真であっただろうか。時が経って、その真偽が問われるようになった。その時それは真理であることをやめたのだろうか。ガレリオが、地球は太陽の周りを動き、太陽が地球の周りを動くのではないことを断言したとき、彼の命題は例外なく論駁された。そのときそれは真実でなかったのか。文明諸国においては、少なくとも今日ガレリオの命題はあまねく信じられている。それは、それゆえに、今日真理であるのか。

A … 真偽を議論しているそのことが、命題を間違っただけのものにしているとは言っていない。ただ、それが真理であるとは証明されていないということを示しているだけです。

B … それでは、真理は決して真偽を問われることがない、それが証明されたあとでは絶対、というのが君の意見なのか。その場合、君は確立した真理の数々を不完全な目録に縮めてしまったのだな。所有の確立あるいは政府の設立の有用性まで否定されるんだぞ。

A … 私は、何人かの頭の固い人たちによって論駁されたからといって、それが一つの見解について論駁の根拠になると考えているわけではありませんよ。

B … 私も、もしその主題が多くの人々に理解できないものだとすれば、いかに多くの人々だとしても、その人々によって反対されているからといって、それを君が一つの見解にたいする論駁の根拠にするとは考えていないよ。

A … 違いますよ。その主題を理解することができ、そしてそれを理解するためのしかるべき方法を用いてきた、自分の考えをもしっかりもっている人たちは、どんな命題に対しても、またそれに関する命題群に対しても、賛成する、あるいは反対する、そのいずれの場合にも、推論の根拠を提供する唯一の人たちだということなんですよ。

B … それでは君は、しかるべき高さの知性をもっていて、経済学の学説を理解するためのしかるべき方法を用いてきた人々、つまり経済学者自身の見解が、その名の下で通用している学説に賛成する、または、それに反対する、何らかの推論の根拠を提供する唯一の見解であるというのかな。

A … そう思います。

B … そう考えるのなら、君が結論から離れていくだろうという心配をしないで済む。

A … どんな結論を考えているんですか。

B … 一つは、経済学の学説が非常に大きな重要性を持っているということだ。

A … どういうふうにしてそれが結論になるんですか。

B … 君は、一つの主題を学んだことのある思慮ある人の見解は、その主題に関する何らかの命題のために一つの推論を形成する唯一の見解だと言っていた。いまやすべての経済学者は、他のどんなことで彼らが不一致になったとしても、この科学が非常に重要なものの一つであるという見解においては結束しているのだ。したがって君によれば、この重要性についてもっとも強固な推論の根拠が存在するということになるのだ。

A … もし全部の主題を包含している一組の命題が実際に確立しているとしたら、そのもつ重要性について反論はしません。しかし重要な命題が何一つ確立さ

れていない以上、私がそれはまったく重要なものではないという見解をもっていても当然です。

B … 君は不完全な確立の真偽を問うテストをまだ何も提案していないのに、その一般的な成立を望んでいると、私が観察していることを認めてくれるかな。命題は証明されたままだときに確立するということを君は認めないのかい。

A … それは認めます。でも証拠が一般的に認められていないとすれば、その証拠は不完全なものと思われるでしょうね。

B … 君はそれについて何も知らない人々の大半が認めていないときのことを言おうというのではないだろうね。

A … いや、そんなことは言いません。私はそれを研究している人々のことを指しています。

B … しかし、経済学を学び、それを熟知している人々の大半が、その学説に同意していないということについて、君はどんな証拠を持っているのかな。

A … この問題については執筆者のあいだで、ほとんどすべての重要な論点について、どんな矛盾がでているか見てください。

B … 私は、君がここでは皮相な外見によって誤りに導かれている、と思ってしまう。

A … それで何を言いたいのですか。

B … 君は標準的な学説に反対する執筆者の側に立っている。つまり、その学説に反対している十分訓練された人々の方に味方しているのだ。しかし事実はずいぶん違う。その執筆者たちはせいぜい半ダースかそれより少ししかない。そうしてそんな場合に書く人とは誰のことか。いったいほかに誰も見たことのない主題の中に何かがあると思ひ込むなんてどんな連中なんだろうか、それは、他方、その問題について学んだあとで、普通に教えられる諸学説の真理を知った人々は、それらに黙って同意し、それらを守り、それらに基づいて行動するけれども、何も書かない。異議を唱えるような連中はすべて書く。信じるものは書かない。君はこのようにしてすべての反対者のことを知る。君は彼らの理解を強制的に知らされるのだ。それでいて君は異議を唱えない幾千の人々については何も知らないのだ。そして、経

経済学を学んだ他のすべての人の合計よりも、その問題についてずっと知識があると考えるに十分な虚栄心を持つ半ダース程の人しかいないような環境の中から、どんな学説に対しても都合の悪いような何が集められるというのか。そして如何によくできていても、どんな諸命題の体系にも反対であるというような叙述を、人は絶えず渴望するものなのだろうか。

A … 私はこの観察の重みをここまでは認めます。つまり、反対することを望むものは普通それを印刷するし、学説を受け入れるものは印刷しない。そして、したがって信奉者はそれが見える以上にはるかに多い数であるはずですが。しかし私たちは、反対を認める者の数もまた多いという強い証拠ももっています。立法府の議員が、その大半が、経済学の学説におけるすべての信頼を放棄しているばかりでなく、科学という言い分はペテンとして扱っているのではないですか。

B … 経済学におけるすべての信頼を放棄してしまっている議員の中で、君は、どれだけのものが、知識を持ってしゃべっており、どれだけの者がそれなしでしゃべっていると、想像しているかね。

A … もし私が、私の見解を正直に言わなければならないとすれば、どちらがどれだけいるのか不確かを決めかねます。彼らの過半数がその知識を、信頼と同様放棄しており、そしてそれを放棄していないものは事実を疑わしいままにしておかないわけです。

B … しかし、主題を知り、また、それを知らないものなかで、何らかの値打ちのある意見はどちらなのか。仮にある目の見えない人が、その前に取りそえられた物の色彩について彼の意見を君に言ったとすれば、君はその男を愚か者だとは思わないかい。また、彼の意見は何の役にも立たないとは思わないかい。

A … 知識を持たない人の意見は、まったく何の価値もないとされるのは認められなければならないでしょう。私はそれはわざわざ意見と呼ぶなければならないようなものではないと思います。それはただ無意味な雑音に過ぎません。命題を述べようとする人は、アイデアを組み合わせることもしないし、それを分別することもしません。彼はただ肯定的な、あるいは否定的な用語を、まとめ合わせているだけです。

B … もしそれほどたくさんの人たちが、そのような意味のない雑音を——ある疑問についてあるものはある一面を、他のものはその裏の一面をとという形で——出しているとすれば、彼らはどちらに対してであれ、それらの推論に何かを付け加えることなんかまったく考えられないんだ。したがって知識に欠け経済学を信用せずそれを軽蔑する立法府の人々は、学説に対して反対の論拠なんか何も出せない。せいぜい無意味な雑音しかそれに対して撒き散らせないというわけだ。

A … これはあなたに賛成しないわけにはいきませんね。

B … 彼らが主として理論を構築するための諸前提についてさえも、経済学者の中には彼らの学説に対して反対する論拠をかかげるような意見の相違点があるが、事實は逆だ。自らの見解に何らかの重みを与えるような十分な知識をその主題についてもっている人の中では、他のどんな道徳的あるいは政治的主题に対してよりもはるかに強力な、素晴らしい一致があるんだ。ほとんど何の例外もなく、まさに重大な点において一般的な合意があるわけだ。そして論争が行われているまさにその点においてさえも、議論は言葉についてであり、考え方はほとんどの場合すべて同じなのである。問題の要約をやっておこう。生産、分配、交換、消費に関する偉大な学説において、君はそれが完全に調和していることを発見する。何らかの論争があっても、それらの偉大な諸学説に含まれる些細な問題のいくつかについてのものに過ぎない。そして私は、若干の例においては、議論の中には文義以上のものがあることを示そうと約束していたかもしれない。

A … 検討が——それは必ず詳細にわたることになるでしょうが——私たちが提供できる以上の時間を要求してこないんだったら、私はあなたのそれをお聞きしたかったですね。

B … しかし、もしも私のこの引き受けた仕事が、この程度のことしかできなかつたら、質疑は終わったということだ。これ以上尊重に値する人間の知識分野は存在していない。そしてそれを軽蔑するように仕向ける人は、ただ自分自身に対してその指示が向けられるだけのことである。

〈完〉

